

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

特に注意！(9月)①

水稲：斑点米カメムシ類



アカスジカスミカメ

アカヒゲホソ
ミドリカスミカメ
(イネホソミドリ
カスミカメ)

ホソハリカメムシ

特徴

- ◆ アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ(別名イネホソミドリカスミカメ)、ホソハリカメムシなどの発生が多い。
- ◆ 畦畔のイネ科雑草などから飛来する。
- ◆ 薬剤散布は出穂期～穂揃期に行う。

防除のポイント

- ◆ 出穂前後10日以内の畦畔除草は斑点米カメムシ類を水田で追い込むため行わない。

イネカメムシに要注意！！



イネカメムシ

本府では現時点では顕著な被害は出ていないが、近年、関東から西日本の複数の都府県から斑点米カメムシの一種であるイネカメムシによる基部斑点米又は不稔米被害が報告されている。イネカメムシは水田飛び込み時期が他のカメムシより少し早めで、開花直後から穂の吸汁加害を始めるので出穂期の防除が必要となる。予察情報等に注意して発生が見込まれるときは防除時期を逸さないように注意する。

原図：農林水産省植物防疫所病害虫情報 第127号

令和6年8月2日発出の病害虫発生予察注意報第3号「斑点米カメムシ類」についてもご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2408_chuuihou03_hantenmaikamemushirui_soshin.pdf

果樹類全般：果樹カメムシ類



チャバネアオカメムシ

特徴

- ◆ チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシなどが加害する。

防除のポイント

- ◆ 園全体を目合い4mmのネットで覆い、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、スタークル(アルバリン)顆粒水溶剤(かんきつ、もも、かき、ぶどう、なしなど)、アディオン乳剤(かんきつ、もも、かきなど)等を散布する。

令和6年8月2日発出の病害虫発生予察注意報第4号「果樹カメムシ類」(本年2回目)についてもご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2408_chuuihou04_kajukamemushirui_soshin.pdf

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

特に注意！(9月)②

きゅうり：コナジラミ類(タバココナジラミ:退緑黄化病)



タバココナジラミ ※



コナジラミ類成虫*



退緑黄化病被害株※

特徴

- ◆ タバココナジラミやオンシツコナジラミが加害する。
- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ 多発すると株全体が弱り、収量も減少する。
- ◆ タバココナジラミは、キュウリ退緑黄化病※1の原因ウイルスを媒介する。
- ◆ CCYVに感染すると、葉に退緑小斑点を生じ、次第に小斑点が増加・癒合しながら徐々に黄化する。
- ◆ キュウリ退緑黄化病と黄化えそ病は見た目で見分けることは困難である。

※1:ウリ類退緑黄化ウイルス(CCYV)によるウイルス病。
きゅうり、メロン、すいか等に感染する。

防除のポイント

- ◆ コナジラミの発生を認めたら、グレーシア乳剤、アファーム乳剤等を散布する。
- ◆ 退緑黄化病は、CCYVを媒介するタバココナジラミの防除の徹底が重要。
- ◆ 発病株はほ場外へ持ち出し処分する。

次回の情報は9月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」 https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/boujo_shishin.html

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

病害虫の発生予報(9月)

A 水稲

品目 \ 程度	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
水稲			紋枯病		
					斑点米 カメムシ類
			トビイロウンカ		

B 果樹

品目 \ 程度	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
果樹類全般					果樹 カメムシ類
ぶどう			べと病		
			褐斑病		
				晩腐病	
			黒とう病		
			チャノキイロアザミウマ		
みかん			フタテンヒメ ヨコバイ		
			ハダニ類		
			黒点病		
			そうか病		
		ミカンハダニ			

C 野菜

品目 \ 程度	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
なす		うどんこ病		アザミウマ類	
ねぎ			ネギアザミウマ (えそ条斑病)		
きゅうり			べと病		
			うどんこ病		
			褐斑病		
			ミナミキイロアザミウマ (黄化えそ病)		
				コナジラミ類 (退緑黄化病)	

D 花き

品目 \ 程度	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
きく				黒斑病・褐斑病 アザミウマ類	

E 野菜類・花き類

品目 \ 程度	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
野菜類・花き類				シロイチモジ ヨトウ ハスモンヨトウ	
			コナガ		
			オオタバコガ		
			アブラムシ類		

水稻

紋枯病



紋枯病発病株

特徴

- ◆ 水際の葉鞘部分に楕円形の病斑ができる。
- ◆ 病原菌は糸状菌の一種で高温(28～32℃)、多湿時に多発する。

防除のポイント

- ◆ チッソ肥料の過用、遅い追肥は避ける。
- ◆ 発生を認めたら、バリダシン液剤5、モンガリット粒剤などを散布する。

注意！

水稻でのモンガリット粒剤の使用時期は「収穫30日前まで」

トビイロウンカ



成虫



坪枯れ症状

特徴

- ◆ 6月下旬～7月上旬の梅雨時期に中国大陸から長翅型成虫(飛来世代)が日本に飛来する。
- ◆ 水田に着地したトビイロウンカは分けつ期のイネの株元に住み着き、茎の表面に産卵する。

- ◆ 卵は1週間ほどでふ化し、幼虫(第1世代)は親と同じくイネの株元で、その師管液を吸汁して成長する。その後、数回の脱皮を経て成虫となる。第2世代、第3世代が繁殖し、出穂期以降に多発すると坪枯れ症状が生じる。

防除のポイント

- ◆ トビイロウンカは稲の株元(水際)に生息するので、稲の株元を叩くなどして発生しているかを確認する。
- ◆ 発生が見られたら、エクシードフロアブル、エミリアフロアブルなどを散布する。



幼虫

詳細は、病害虫カラー技術資料「水稻 トビイロウンカの防除 改訂版 R6.7」をご参照ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/tobiirounka-osaka.pdf>

ぶどう

べと病

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(笠かけを含む)には使用しない等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。



葉裏の症状



葉表の症状

特徴

- ◆ 雨が続くとまん延しやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたらエトフィンフロアブル、レーバスフロアブル等を散布する。
- ◆ 農薬を散布する際に、葉害や果実の汚れを避けるため、笠・袋かけ後は棚上散布を行う。

褐斑病



被害葉



被害葉(拡大)*

特徴

- ◆ 米国系品種に弱い品種が多く、デラウェア、バッファローなどに発生が多い。
- ◆ 多発すると、葉が早期落葉し、果実の着色が不良となる。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル、ネクスターフロアブル等を散布する。

晩腐病



被害果※

特徴

- ◆ 新梢伸長期～収穫期に雨が多いと多発しやすい。
- ◆ デラウェアに発生が多く、病原菌は結果母枝、巻きつるなどで越冬する。

防除のポイント

- ◆ 施設内への雨滴の侵入を防ぐ。
- ◆ 笠かけや袋かけを行う。
- ◆ 被害果房は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 前年度の発生状況をふまえ、フルーツセイバー、ファンタジスタ顆粒水和剤等を予防的に散布する。

ぶどう

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(笠かけを含む)には使用しない等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。

黒とう病



被害果



被害果(拡大)

特徴

- ◆ 葉、果実、新梢、巻きヒゲに発病し、大粒系に発生が多い。
- ◆ 枝や果実に黒色の病斑が生じ、果実肥大の不良など品質低下につながる。

防除のポイント

- ◆ 雨よけすることで被害が軽減できる。
- ◆ 被害果房や枝は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 5月中旬以降は園芸ボルドー、ストロビードライフロアブル等を予防的に散布する。

チャノキイロアザミウマ



被害果*

特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

防除のポイント

- ◆ ディアナWDG、エクシレルSE等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

フタテンヒメヨコバイ



被害葉*

特徴

- ◆ 葉の裏側から吸汁する。被害部分は色が白く抜ける。

防除のポイント

- ◆ 園周辺の草むらや落葉下で多く越冬するので、周囲の除草や清掃に努める。
- ◆ 発生に注意し、被害の初期に防除する。
- ◆ 発生を認めたら、スタークル(アルバリン)顆粒水溶剤、アディオン水和剤等を散布する。

ぶどう

ハダニ類

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(笠かけを含む)には使用しない等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。



カンザワハダニ※

特徴

- ◆ 加温機の近くやダクトの先端部等、高温になりやすいところから発生することが多い。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ダニコングフロアブル、ダニトロンフロアブル等を散布する。

みかん

黒点病



被害果

特徴

- ◆ 雨が連続すると発生が増加する。
- ◆ 葉、枝、果実に感染して、微小な黒色、円形の病斑ができる。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期にジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤、ストロビードライフフロアブル(かんきつ)等を散布する。降雨が多い場合には、散布回数を増やす。
- ◆ ジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤を使用する場合は、皮膚のかぶれに注意する。

そうか病



被害果(そうか型病斑)

特徴

- ◆ 降雨時間が長いと発病が多い。
- ◆ 葉、果実の表面に、直径1ミリ前後に隆起する「イボ型」や「そうか型」の病斑ができる。
- ◆ 果実の外観が悪くなり、糖が少なく、酸が多くなるなど品質が低下する。

防除のポイント

- ◆ 被害葉・被害果は早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ チッソ質肥料の過用を避ける。
- ◆ 排水、通風を良好にする。

みかん

ミカンハダニ



被害葉

特徴

- ◆ 気温が高く、降水量が少ないと発生が多くなる。
- ◆ 葉表に体長0.5mmの赤色のダニが寄生して吸汁するため、被害部分は色が抜けて白くなる。
- ◆ 果実に寄生すると着色が遅れ、色がぼけて商品価値が低下する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ダニコングフロアブル、スターマイトプラスフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

野菜

なす

うどんこ病



葉表の病斑



葉裏の病斑

特徴

- ◆ チッソ過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたらパンチョTF顆粒水和剤、スコア顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

なす

アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※



被害果

特徴

- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。なお、ミカンキイロアザミウマの果実被害は、「水なす」で目立つ。

防除のポイント

- ◆ 発生が見られたら、モバントフロアブル、ファインセーブフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。

ねぎ

ネギアザミウマ(えそ条斑病)



えそ条斑病の葉の病斑



ネギアザミウマ

特徴

- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉がしおれて枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ えそ条斑病に対する有効な薬剤はないので、媒介昆虫であるネギアザミウマの防除を徹底するとともに、感染株を見つけたらほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ えそ条斑病の病原ウイルス(IYSV)は一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、プレオフロアブル、アグリメック等を散布する。なお、薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

きゅうり

べと病



被害葉*

特徴

- ◆ 気温20～24℃で発生が多い。
- ◆ 下位葉に葉脈で囲まれた黄色角形の病斑ができ、上位葉へ拡大する。

防除のポイント

- ◆ 排水を良好にし、過湿を避ける。
- ◆ 施設栽培では換気に注意し、結露を避ける。
- ◆ 被害茎葉を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 肥料切れしないように、肥培管理に注意する。
- ◆ 発生を認めたら、リドミルゴールドMZ、アミスター20フロアブル等を散布する。

うどんこ病



被害葉*

特徴

- ◆ 施設栽培で、日照不足、乾燥時に発生が多い。
- ◆ 昼夜の温度差が大きくなると発生が多い。
- ◆ はじめ株の下位葉に小麦粉をかけたような病斑ができる。しだいに上の葉に広がり、葉面全体が白色の粉を振りかけたようになる。

防除のポイント

- ◆ 施設内の換気を良好にする。
- ◆ 被害葉を除去し、通風を良くする。
- ◆ 発生を認めたら、アフェットフロアブル、トリフミン水和剤等を散布する。

褐斑病



病斑

特徴

- ◆ 高温、多湿の施設栽培で発生が多い。
- ◆ 天井フィルムからの結露水のボタ落ちで発病が助長される。
- ◆ はじめ葉に円形・褐色の小型病斑を生じ、やがて灰褐色の5～10mm程度の不規則な病斑になる。多湿条件では病斑上に黒褐色のカビが生える。

防除のポイント

- ◆ 施設内の換気を良好にし、多湿にならないよう注意する。
- ◆ 被害葉・老化葉は早めに除去する。
- ◆ 発生を認めたら、カンタスドライフロアブル、プロポーズ顆粒水和剤等を散布する。

きゅうり

ミナミキイロアザミウマ(黄化えそ病)



ミナミキイロアザミウマ被害葉※

特徴

- ◆ アザミウマの発生初期は、葉の葉脈沿いにカスリ状の白い斑点を生じる。
- ◆ キュウリ黄化えそ病※1等のウイルスを媒介する。
- ◆ MYSVに感染すると、葉にえそ斑点を伴うモザイク症状や黄化等の症状を示す。

※1:メロン黄化えそウイルス(MYSV)によるウイルス病。
きゅうり、メロン、すいか、しろうり、にがうり等に感染する。

防除のポイント

- ◆ 施設の開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ ミナミキイロアザミウマの発生を認めたら、グレーシア乳剤、アフーム乳剤等を散布する。
- ◆ 黄化えそ病の発病株はほ場外へ持ち出し処分する。



黄化えそ病被害葉※

花き(きく)

黒斑病、褐斑病



病斑*

特徴

- ◆ 雨滴によって感染が拡大する。
- ◆ 病原菌の生育適温は24～28℃ぐらいである。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ダコニール1000等を散布し、予防に努める。
- ◆ 発生を認めたら、ベンレート水和剤、ストロビーフロアブル等を散布する。

注)ダコニール1000は、花弁に薬液が付着すると漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布はさける。また、かぶれに注意する。
ストロビーフロアブルは高温多湿下では、薬害の恐れがあるので使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

花き(きく)

アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 品種により被害の現れ方に差がある。
- ◆ 花卉にはミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマなどが加害し、葉には主にクロゲハナアザミウマなどが加害する。
- ◆ ミカンキイロアザミウマはウイルス(TSWV※1、CSNV※2)を媒介する。

※1 キクえそ病の病原ウイルス ※2 キク茎えそ病の病原ウイルス

防除のポイント

- ◆ ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ きくの残さは放置せず、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ビニールなどのマルチングにより、土中での蛹化を防ぐ。
- ◆ 施設の開口部を目合い0.8mmの赤色ネット又は0.4mmのネットで被覆し成虫の侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC(花き類・観葉植物(除りんどう))、アフーム乳剤などを散布する。

野菜類・花き類

シロイチモジヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 本種はねぎでは葉身内に食入し、薬剤が届きにくくなるので、早期発見に努める。
- ◆ 発生を認めたら、プレオフロアブル(ねぎなど)、グレーシア乳剤(ねぎなど)等を散布する。

ハスモンヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ なす科野菜、さといも等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、アディオソ乳剤(オクラ、さといも、さといも(葉柄)、など)、ディアナSC(かぼちゃ、なす、トマト、ミニトマトなど)等を散布する。

ヨトウムシ類については「ヨトウムシ類の見分け方」をご参照ください。
https://www.jppn.ne.jp/osaka/color/yoto/yoto_l.pdf

野菜類・花き類

コナガ



幼虫 ※



成虫 ※

特徴

- ◆ 主にあぶらな科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆ 同じ系統の薬剤を連用しないよう注意する。
- ◆ 発生を認めたら、ゼンターリ顆粒水和剤(野菜類など)、ディアナSC(キャベツ、こまつななど)等を散布する。

オオタバコガ



幼虫



卵

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫のフンが確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、捕殺等も含めて早めに対応を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレバソンフロアブル5(なす、トマト、ミニトマトなど)、ディアナSC(トマト、なす、ミニトマトなど)等を散布する。

令和6年5月24日発出の病害虫発生予察注意報第2号「オオタバコガ」
についてもご参照ください。

[https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/
2405_chuuihou02-ootabakoga.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2405_chuuihou02-ootabakoga.pdf)

アブラムシ類



ワタアブラムシ ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(しゅんぎく、なす、トマト、ミニトマトなど)、コルト顆粒水和剤(トマト、ミニトマト、なすなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。